古典　ワークシート①

二年　組　番

菅原孝標女

更級日記

門出

東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を作りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せたまへ。」と、身を捨てて額をつき、祈りまうすほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。

年ごろ遊び慣れつる所を、あらはにこほち散らして、立ち騒ぎて、日の入り際の、いとすごく霧り渡りたるに、車に乗るとてうち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

題名

日時

登場人物

行動

セリフ

心情

●現代語訳

東国へ行く道の終点（である常陸の国）よりも、もっと奥のほうの土地（である上総の国）で育った人（つまり この私）は、どんなにかみすぼらしく 田舎じみていただろうに、何が原因で思い始めたことなのか、この世間に物語というものがあるとかいう、その物語をなんとかして読みたいものだと思い続け、所在もなく退屈な昼間や、宵の家族の語らいの折などに、姉や継母などのような人々が、その物語、あの物語、（さらには）光源氏の生活ぶりなどを、ところどころ話すのを聞くにつれ、ますます（物語に）心引かれる気持ちが募るけれど、私の気が済むように、暗記していてどうして思い出して話してくれようか、いや、とても話してはくれない。（私は）ひどくじれったいので、（自分の）身の丈と同じ大きさに薬師仏を造っ（てもらっ）て、手を洗い清めなどして、だれも見ていないすきに、こっそり（仏間に）入っては、「（私を）京に早くお上げになって、物語がたくさんございますとかいう、その物語をすべてお見せください。」と、身を投げ出し（夢中になっ）て額を床につけて、お祈り申し上げているうちに、十三歳になる年、（父の任期が終了し）帰京しようということで、九月三日に門出をして、（ひとまず）「いまたち」という所に移る。

長年の間遊びなじんできた部屋を、外からまる見えになるほど壊し散らして、（人々は引っ越しの準備に）大騒ぎをして、日の沈みかかったころで、たいへんもの寂しく一面に霧が立ちこめているころに、車に乗るということで（邸のほうに）ちらっと目を向けると、だれも見ていないすきに（くり返し）お参りをしては額を床につけ（てお願いし）た薬師仏が立っていらっしゃるのを、お見捨て申し上げることが悲しくて、人に気づかれぬように思わず泣いてしまった。